日吉台地下壕保存の会会報

第１５５号

日吉台地下壕保存の会

戦没学生・上原良司の学徒出陣

副会長　亀岡敦子

2023 年は学徒出陣 80 年にあたります。1873 年に制定された、徴兵令（1927 年から兵役法）では、20 歳以上の日本男子全員に、3 年間軍務につく義務がありました。しかし大学や高等専門学校などで「国家のために有用な学問をしている学生・生徒」には、在学中は 20 歳以上でも徴兵が延期されていました。しかし、1943 年 10 月、兵力の補充と悪化している戦局挽回のために学生の徴兵猶予を停止して、20 歳以上の文系学生の徴兵が決められました。ちょうどその対象となった学生は、どのようにしてそれを知り、どのような行動をとったのでしょうか。慶應義塾大学から陸軍に入営し、沖縄戦で航空特攻死した上原良司の行動を辿って、学徒出陣を考える参考のひとつにしていただけると幸いです。

1941 年 4 月に、上原良司は慶應義塾大学経済学部予科に入学し、まだ新しい日吉キャンパス（1934 年開校）で、軍事色は強まっていたとはいえ、残された日記や家族の証言によると、学生生活を享受していたようです。1943 年 9 月 14 日に予科最後の試験が終わると、目黒雅叙園でクラス会を開き、翌日安曇野に帰省しました。帰省中や旅行中の学生が多かったようです。そこへ 9 月 22 日の朝刊を通じて、夜 7 時 30 分からの「国民に告ぐ」という番組で重大発表があるとの予告がありました。ラジオ放送を通じて東條英機首相が、文科系学生の徴兵猶予を停止するとの方針を告げました。良司が誰とこの放送を聴いたのか、どこで聴いたのか定かではありませんが、日記には東京に戻った記述はありませんから、安曇野ではないかと推測されます。

その放送を聴くや否や、愛読書である羽仁五郎著『クロオチェ』の表紙裏の 4 頁に遺書を書いた。「遺書　父上様並びに母上様」と書き始め、中段に「私が戦死したと聞かれても、決して嘆かないでください。私は戦死しても満足です。何故ならば、私は日本の自由のために戦ったのですから。」という一文など、まだ軍隊に入ってもいないのに、まるで戦死が運命かのような書き方です。そして続く頁では、兄弟姉妹、親しかったひとびとへの感謝と別れを告げています。最後の 3 種の短歌は、石川啄木と母校の応援歌などをもじったものです。言葉遊びが好きな良司らしいと思います。

この日、最後に良司が、『クロオチェ』の本文の文字を丸で囲むことによりしたためたのは、初恋の女性、石川冷子への 110 字ほどの恋文で、「きょうこちゃん　さようなら」で始まり「わたしはいつも　きみをあいしてる。」で終わっています。誰にも見つからないように本棚の引き出

【目次】

巻頭言【1-2p】戦没学生・上原良司の学徒出陣　副会長　亀岡敦子
報告【2-9p】第 26 回戦争遺跡保存全国ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ横須賀おっぱま大会
◇分科会報告　副会長　喜田美登里、運営委員　山田　譲
◇現地見学会　運営委員　山田　譲　会員　関崎益男
連載【9-11p】日吉海軍・設備アレコレ(36) 日吉海軍の設備関係者の主要な手記・聞き取り・文献　運営委員　山田　譲
お知らせ【11p】記念講演会２、日吉キャンパス建築特別見学会
連載【12p】海外戦跡めぐり(24) 台湾と清仏戦争　運営委員　佐藤宗達
感想文【13p】『検証　ウクライナ侵攻 10 の焦点』を読んで　運営委員　山田　譲
報告【14p】地下壕展示会と講演会　運営委員　小山信雄
訃報【14p】中沢正子さんが亡くなりました
本、資料集の発行【15p】「日吉台地下壕 大学と戦争」「資料集２、３」
活動の記録【16p】2023.7 月～2023.10 月

しに釘で細工してありますが、自分の死後、見つけてもらうために、この徴兵を知った日から、1 年 8 か月後の特攻出撃の 2 日前に、両親と姉妹宛に遺本の在り処について葉書を出しています。

9 月 30 日良司たちは予科を修了し、10 月 4 日には本科の入学式が行われました。合間に大げさな「出陣学徒壮行会」に参加し、徴兵検査のために本籍地である安曇野にも帰りました。その時、良司の部屋から繰り返しベートーヴェンの交響曲第五運命が聞こえていたそうです。おそらく、この年出征した青年たち、翌年出征した青年たち、次に出征した青年たちの数だけ、それぞれの「学徒出陣」があったことでしょう。

そして、それ以前から常に戦争に駆り出されていた青年たち、農村・漁村・商家・工場・会社でまじめに働き、当たり前の家庭を作っていた青年たちにも、その数だけの出征にまつわる物語があるはずです。それらは間違いなく悲劇的な物語でしょう。いまなお、その悲しい物語は、世界のあちこちで生まれているのです。歴史から学べない愚かな為政者に絶望しそうになるけれど、戦争遺跡保存に関わる私たちは、細やかな活動を続けたいと思います。

報告　「第 26 回戦争遺跡保存全国シンポジウム横須賀おっぱま大会」

9 月 16 日（土）から 18 日（月）にかけて、追浜コミュニティーセンターにおいて「第 26 回戦争遺跡保存全国シンポジウム横須賀おっぱま大会」が開催され、延べ 300 名の参加となりました。初日の全体会・講演会に続き、翌日には分科会が開かれ、第三分科会では当会から「小中学校への出張授業で生徒が好反応」という課題で報告が行われました。最終日には３コースに分かれ現地見学会が開催されました。

第 26 回横須賀おっぱま大会分科会レポート一覧

【第 1 分科会（保存運動の現状と課題）】

No	氏名	所属団体	レポート課題
1	中田　均	浅川地下壕の保存をすすめる会	北海道での本土決戦態勢 ～太平洋沿岸のトーチカ～
2	林　美帆 除本理史 吉田弘實 村田秀石 大野　治	亀島地下工場を語りつぐ会	岡山県倉敷市水島における戦争遺跡の保全と活用に向けて ー亀島山地下工場をめぐる最新動向ー
3	平山次清	NPO 法人アクションおっぱま	海軍航空技術廠施設遺構（等速曳航水槽）の現状紹介と保存
4	鮎沢　譲	山梨県戦争遺跡ネットワーク	戦時期の山梨県韮崎の七里岩地下壕と朝鮮人労働者
5	金　穂実	NPO 法人松代大本営平和祈念館	市民団体による松代大本営地下壕保存運動ー観光地の影響と説明板書き換え問題に注目してー

【第２分科会（調査の方法と整備技術）】

No	氏名	所属団体	レポート課題
1	大西　進	戦争遺跡保存全国ネットワーク（河内の戦争遺跡を語る会）	大阪府東部地域の防空体制の調査
2	高谷和生	くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク	第三十戦闘飛行集団地下司令部壕と戦後接収の熊本（健軍）飛行場
3	工藤洋三 前薗廣幸	戦争遺跡保存全国ネットワーク	下関防備隊波津崎防備衛所の遺構
4	平川豊志	松本強制労働調査団	松本陸軍墓地の今
5	橘　尚彦	戦争遺跡保存全国ネットワーク（NPO 法人旧真田山陸軍墓地とその保存を考える会）	大阪・旧真田山陸軍墓地の神奈川県出身者墓地
6	牛島真満	戦争遺跡保存全国ネットワーク	第３２軍首里司令部壕の今と保存・公開に向けて

【第３分科会（平和博物館と次世代への継承）】

No	氏名	所属団体	レポート課題
1	中村雪子	NPO 法人松代大本営平和祈念館	松代大本営平和記念館のガイド活動
2	中瀬将史	NPO 法人松代大本営平和祈念館	松代大本営ガイドデビュー２年生
3	喜田美登里 山田　譲	日吉台地下壕保存の会	小中学校への出張授業で生徒が好反応
4	春日みわ 光武　鮎	松本強制労働調査団	松本強制労働調査団わかぞう合宿の報告
5	芹沢昇雄	NPO 法人中帰連平和記念館	「戦争加害」の継承について ー戦跡保存ネット「発言主旨」ー
6	池田恵美子	NPO 法人安房文化遺産フォーラム	館山まるごと博物館から東京湾エコミュージアムへ

◇分科会報告

小中学校への出張授業で生徒が好反応

報告者：日吉台地下壕保存の会　喜田美登里、山田　譲

⑴コロナ下での模索

従来、私たちは日吉周辺の小中学校の地下壕見学会に力を入れてきました。2020 年 2 月には横浜市立大綱中学校の生徒 8 クラス 289 人を 3 回に分けて案内しました。しかし、その直後に新型コロナを理由に全国の学校が休校になってしまいました。日吉の見学会も大学の許可がおりず 1 年近く中止になり、慶應大学、慶應高校の授業としての見学会の再開を手始めに、現在では一般参加者向け定例見学会を参加者数を 30 人にしぼって再開しています。しかし現在でも小中学校の見学会は、学年単位で大人数になるので再開できていません。

そういう中で私たちは見学会のかわりに、学校に出かけて行って出張授業をしようと考えました。そのためのパワーポイントを四苦八苦しながら作成し、2022 年から出張授業を始めました。今年は 2 月 28 日に日吉台小学校、3 月 1 日に新吉田第二小学校、3 月 17 日に

日吉台中学校、さらに5月15日にも日吉台中学校で出張授業をしてきました。

学校側の位置づけとしては、平和学習または地域学習ということになります。修学旅行や校外学習が難しい中で、この出張授業は学校側としても好都合だったのだと思います。ただ小学校の場合は1時間の授業時間の枠組みでやるので、パワーポイントを見せながらお話しするので精一杯でした。みんな、しっかり聞いてくれていて、やってよかったなと思ったのですが、児童のみなさんは感想文を書いてくれました。これを見ると、日吉に海軍が来て大地下壕を掘ったことは、空襲などの被害の遺跡でなく戦争遂行＝加害の遺跡として児童たちも（先生方も）受けとめてもらうことができたことがわかりました。

⑵日吉台中学校出張授業での新たな試み

また日吉台中学校からも出張授業の依頼が来ました。こちらは小学校と違って2時間の授業時間枠です。これだとパワーポイントだけでは時間が持ちません。それで残りの時間をどうしようかと考えました。

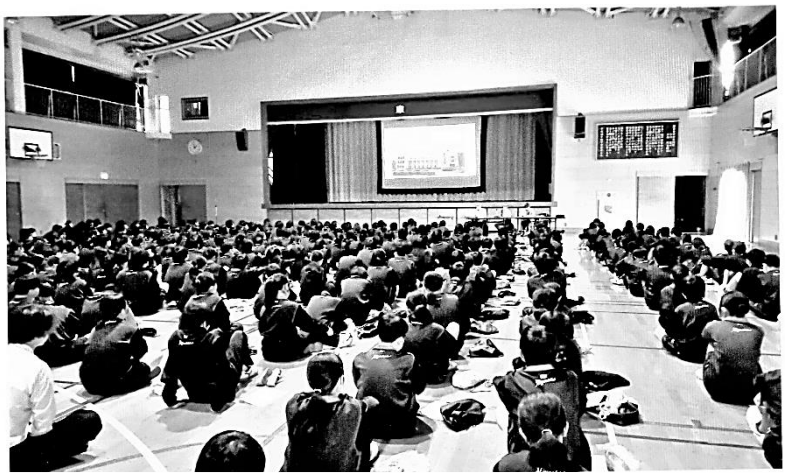
パワーポイントをつくる時も考えたのですが、児童生徒たちにとって身近な日吉の町の歴史として学んでもらうことが大事だと思います。それでパワーポイントの初めに米軍偵察機が戦後に撮影した日吉の空中写真を見せて、今の住宅街の日吉とは全然違う空襲被害の様子を見せました。これはインパクトがあります。そこから日吉の海軍の話に持っていくわけです。

そういう発想でいくと日吉の地域学習としては、日吉は縄文時代、弥生時代、古墳時代の古代遺跡がたくさんあります。そういう話も組み込むことにしました。生徒の足元に目を向けてもらおうということです。

でもそれだけでは、ものたりません。それで日吉の慶應大学で学んだ学徒兵の話もしようと考えました。慶應出身の元特攻隊員に岩井忠正さんがいます。この方は弟の岩井忠熊さんとともに、自身の特攻体験を本に書いています。私たちの会でも講演をしていただきました。この方は自分が特攻に志願したことを「拒否する勇気がなかった」「負けるとわかっていたのに、自分は戦争に対して声を上げられなかった。」「このあやまちを若い人たちは繰り返さないでほしい」と訴えていた方です。（昨年102歳で亡くなりました。）このことも生徒のみなさんにお話しして語り継いでいくことにしました。

⑶中学生たちの感想文に手ごたえ

日吉台中学校では3月17日に2年生9クラス350人、5月15日には新2年生9クラス360人が体育館に集まり出張授業をおこないました。こんな大人数で生徒は集中して2時間も話を聞いてくれるのかなと思ったのですが、途中で休憩をはさんでみんな熱心に聞いてくれました。居眠りしている子もいないではなかったのですが、全員が感想文を書いてくれました。これを読むとみんな、しっかりと話を聞いていたことがわかり驚いた位です。感想文の特徴は、みんな自分自身の感じたこと、考えたこと、わからなかったことを書いていて、「平和が大事」といった紋切り型の言葉が全くないことです。そして、自分がどうするのかという主体的な書き方をしている生徒が多いのです。これはウクライナ戦争に直面して、人ごとのような戦争への感じ方がなくなっているのだと思います。



5月15日の日吉台中学校出張授業

そして、やはり中学２年生になると小学生６年生とは感じ方、考え方が大分違うのだなと思いました。自分というものをかなり意識しているように思いました。こういう年代の生徒に日吉の戦争遺跡と日吉海軍のこと、日本の権力者が引きおこした戦争のことを語り継いでいくことの大切さを強く感じました。

今後も見学会とは別に、この出張授業を続けていこうと思います。

2023.3.17.日吉台中学校２年生　出張授業感想文より

◎私は特に話の中で人間魚雷などの兵器が、人の命を犠牲にするものだと知り、改めて戦争のむごさを実感した。また、正直なところ日本が平和主義をかかげて70年以上がたつが、日本はそこから今まで戦争をしてないので、もうあまり戦争について考え飽きた？ところがあったが、ロシアとウクライナの戦争のはじまりと、今回の学習で、より戦争のことについて知ったので、もう一度考え直さなければいけないと思った。

◎僕は講演を聞いて改めて戦争の怖さを知りました。自ら命を捨ててまで敵に攻撃を与える特こうの様々な兵器を知った時は、もし自分がその立場だった時の恐怖はすごいものだと思いました。これから二度と戦争が起こらないように体験した人がいなくなっても戦争の恐ろしさを語り継ぐ事が大切だと思いました。

◎もちろん戦争はよくないことだけれど、あまり戦争のことを理解していなかったけれど、これを機に、戦争へのたくさんの学びがありました。実際に日吉も戦場だったことや、母校の日吉台小学校も燃えてしまっていたんだなって考えると、とても恐怖でした。みずから死に行くようなじさつのばくだんなどもすごく残こくでとても鳥肌が立ちました。戦争はなにも生まないし、なぜやるのか、もっと頭がよくなかったのかと、とても疑問でたまりませんでした。

◎改めて戦争は二度とおかしてはならなくて、それを後世に伝え継いでいくことが大切だと思った。戦争中みんなは国に従わなければならないと自分の意志を捨てて、戦争に賛成しているということを聞いて心が痛くなった。自分は意志が弱いから、この話とは比べものにならないけど、しっかり自分の意見を持ってまわりに左右されないような人になりたいと思った。特攻の話では自分の死を覚悟して乗ることがどんなに苦しいものか痛感した。

◎自分が思っていたよりも戦争が身近にあっておどろきました。日本が被害をうけたことはよくきくので知っていましたが、それと同じように加害していたこともよく知って、戦争はきずつけ合うだけなのだと思いました。昔のあやまちを二度とおこさないようにして、当たり前の日々に感謝しながら生きていきたいと思いました。

◎「戦争は終わりたくても、終わることができない」という言葉が深く胸に響いた。終わりたくて、終わることができるのなら、ここまで被害は出なかったと思った。自分の思いが一つも通らないところも含めて、戦争の良さはやっぱり無いと感じた。中学生くらいの子でも、たくさん働かなければならないのが、すごく大変で辛そうだった。生まれる時代が違うだけで、こんな目に合わなければいけないことがすごくざんこくに感じた。戦争を始める人はどういう気持ちでやっているのか考えてみたい。

おっぱま実行委員のみなさま

2023.5.15.日吉台中学校2年生　感想文の中の質問34件からの抜粋

○地下壕の中でどのような病気になってしまったのか知りたいです。
○女性の人は戦争中どんなことをしていたんですか。
○戦争を行っていたころ、市民はどうやって逃げられたのだろう。
○特攻する人はあらかじめ遺書を書くのでしょうか。もし書いていたならばどのような事を書いているのか知りたいです。
○戦争に行く人達は何かもらえたのですか。例えばお金とか称号だとか。戦争で町はどのくらい変わったのか気になりました。
○平和講演会を聞いて僕はアメリカを奇襲したのにどんどん負けていって無駄に人が死んでしまうのはただの無駄に感じます。どうして途中でやめなかったんでしょうか？もしかしたら偉い人がプライドを維持するためずっと国民が戦争を続けていたんですかね。
○上の人達に「死んでくれ」と言われて「いや」と言いづらかったのはわかりましたが、それでもお願いを断った人はいたんですか。
○あれ程の防空壕を一体誰が提案し、あの時代に気づかれずどうやって作ったのかが気になりました。
○日吉だけでもすごい攻撃を受けたのに、他の県はどう対策をしたのかなって気になりました。
○モールス信号は聞き逃したときはどうしていたのか気になった。
○どうやって考えたら「敗けそうになったら特攻」の考えが生まれたのか。またなぜ実行したのかが気になりました。
○地下だったので電波は大丈夫だったのか気になりました。
○なんで戦争というのは起きてしまうのか本当に疑問に思いました。
○地下壕中はどれくらいの人数が入れるんですか。
○大学でまともに授業が受けられなかったように小学校・中学校で授業内容などに何か影響はありましたか。
○防空壕に避難している時間は長くて何日でしたか。
○日吉台小学校で戦争のなごりのようなもので残っているものはありますか。
○特攻兵器の名前の由来はありますか。
○地下壕を作るにはどのくらいの時間がかかったのか教えてほしいです。
○日吉台地下壕は戦争が終わってから使われたことはありますか。
○地下では空気は外から取ることができたと聞きましたが、トイレなどはどうしていたんですか。

◇現地見学会

戦争遺跡保存全国シンポジウム　横須賀おっぱま大会　フィールドワーク
「三浦半島に残る本土決戦の遺跡」

運営委員　山田　譲

米ヶ浜砲台弾薬庫跡

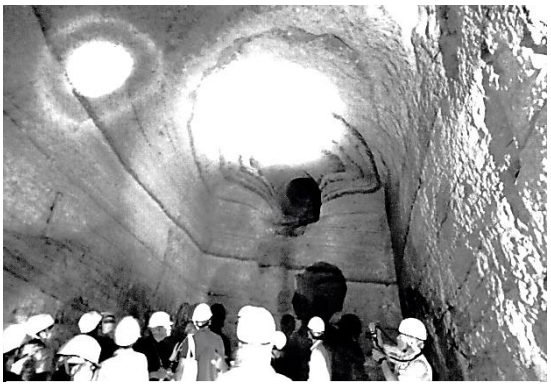
9月18日に全国シンポ・おっぱま大会の三浦半島フィールドワークに参加してきました。8時30分に横須賀中央駅近くに集合、大型バスに40人乗車して出発しました。案内していただいた方は、デビット佐藤さんこと佐藤正弘さんです。この方は横須賀、三浦エリアの戦争遺跡をくわしく調査し、見学案内をしてくださっている方です。地元の有名人です。

①横須賀平和中央公園――米ヶ浜砲台跡

最初に行ったのは駅からほど近い平和中央公園です。ここは戦時中は米ヶ浜砲台だった所です。名前と違って海から離れた眺望のよい丘の上で、戦没者慰霊塔がありました。目の前の海には猿島があり、その左右には第一海堡と第二海堡が見えます。左の横須賀軍港沖の海上には米軍のイージス巡洋艦（バンカ―ヒル型）が停泊していました。

砲台のあった場所は平和モニュメントが建てられています。その裏側に弾薬庫跡が２ヵ所ありました。ドアのカギを開けてもらい、中に入ることができました。観光協会が関わっている催しだと行政側の対応も違いますね。ところで、この弾薬庫は公園のトイレとして使われていたのだそうです。ですので中はとてもきれいです。こんな再利用にはびっくりでした。公園の西側の出口の先には陸軍の境界標の石柱もありました。

②電力中央研究所――大楠海軍機関学校の地下壕



大楠海軍機関学校地下壕講堂跡

バスは三浦半島を横断して西側の相模湾の方に向かいました。行先は佐島マリーナに近い電力中央研究所です。ここは全国の電力会社が共同して設立した広大な研究所です。大きな建物がたくさん建っていて、高電圧実験設備など大規模な研究装置が置かれています。ここにあったのは海軍機関学校で、軍艦のエンジンや発電機などの電気設備を操作する機関兵を教育した学校です。

ここにどんな戦争遺跡があるのだろうと思っていたら、行先は裏山に掘られた地下壕でした。総延長 400mの地下壕と小さめの壕があり、私たちは前者の壕に案内されました。壕は砂岩を掘った素掘りでツルハシの跡が残り、ほぼ方形のきれいな断面の通路とこれに直交する広めの部屋が連なっていました。出入口は３つあり、奥には天井が 5m以上ある広い部屋がありました。「地下の講堂ではないか」と説明されていました。通路の天井には碍子もいくつか残っていました。ここは設営隊ではなく機関学校生徒が掘ったという説明でした。また築造時期は 1944 年後半からとのことでした。

地下壕の通路は今ではコンクリートブロックの壁で仕切られていて、機械を置いて研究に使っていました。「地震計もあるのでさわらないでください」と言われました。ここでも戦争遺跡を再利用していました。とても明るい LED 灯が付いていて、さすがは電気屋さんです。

③ソレイユの丘公園――海軍第一武山航空基地跡

バスは海軍武山海兵団（海軍新兵の訓練所）の所在地だった自衛隊基地の脇を南下しました。ここは自衛隊の陸海空３軍が並ぶめずらしい基地だそうです。海自教育隊、陸自駐屯地、陸自少年工科学校、空自分屯地が続いています。

目的地は「長井海の手公園ソレイユの丘」です。ここは入場無料でアトラクション設備やアウトドア宿泊設備が整った大きな公園です。当日は敬老の日の休日で、親子連れで大賑わいでした。しかし、ここも戦争遺跡です。海軍第一航空基地の滑走路がありました。戦争末期の本土決戦・特攻基地です。しかし実戦で使われる前に敗戦になったようです。

その滑走路跡の先には航空自衛隊の基地があり、対空ミサイル PAC３が配備されています。これは横須賀の日米の軍港を中国・北朝鮮の攻撃から守るためのものです。したがって攻撃する側からすれば最初の攻撃対象です。沖縄の与那国島同様の最前線がここにもあると思うとヒヤリとします。

この公園は海からそそりたつ台地の上です。相模湾の向こうには大島や富士山も見えて、すばらしい眺望です。私たちは暑い日差しを避けて、池の脇の大屋根ステージの座席で食事

しました。そこではちょうど中国雑技団の若者がハラハラドキドキの妙技を演じていました。子どもたちも大喜びで拍手喝采です。先ほどのPAC３とは好対照で、やはり戦争を止める力は他国への理解と共感だと思いました。

④城ケ島砲台・地下弾薬庫跡と砲側観測所跡

城ケ島第一砲台揚弾室

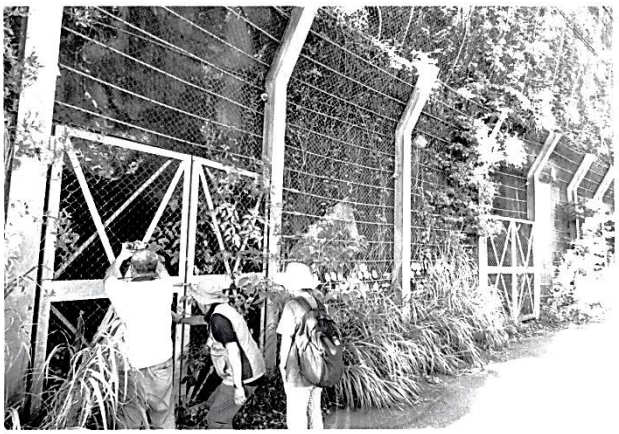
次に向かったのは城ケ島です。ここには砲台が2基あり、その砲座跡と弾薬庫、着弾を観測する砲側観測所が残っています。城ケ島は東西に細長い島で東側に砲側観測所があり、島の中央西寄りに第一砲台、東寄りに第二砲台がありました。私は10年ほど前にも来たことがありましたが、その時は第二砲台の地下弾薬庫を見学しました。当時、第一砲台弾薬庫の入口は藪だらけで中には入れませんでした。

しかし今回は第一砲台弾薬庫を公園管理事務所の方に案内していただきました。公園の駐車場には砲座の跡が円形の花壇になっています。そこから北側の斜面に通路が整備されていました。崖の中腹の壕入口には赤、黄、緑の迷彩が描かれています。中は細長い通路があり弾薬庫が３室と、砲弾を砲塔に持ち上げる揚弾室があります。地上に通じる通気坑もあります。この構造は第二砲台弾薬庫と全く同じでした。壁は白い漆喰塗りで、湿度が高いので結露を防ぐためだそうです。砲側観測所の鉄扉も開けていただき、中を見ることができました。砲側観測所の上は展望台です。ここもすばらしい眺望ですが、なぜか相模湾の海上に米軍のイージス艦（アーレイバーク級）が停泊していました。なぜあんな海上でじっとしているのか、不思議でした。

⑤諸磯湾――特攻潜水艇・海龍格納壕

最後は油壷湾の南側にある諸磯の入り江に行きました。ここはヨットハーバーで、海沿いの道路横の崖に特攻潜水艇・海龍の格納壕が２基、掘られています。高さ３ｍ位で奥行きは10ｍ以上の素掘りです。中は暗くてよく見えませんでした。

横須賀鎮守府所属、第一特攻戦隊第十一突撃隊の第一～第三海龍隊がここに配置されました。全国の海龍基地には空洞のままの海龍格納壕もありましたが、ここは実際に海龍が配備されていたようです。それにしても、ここでどんな訓練をしていたのでしょうか。人間魚雷回天の体験者の回想記は少なくありませんが、海龍の体験記は見たことがありません。


諸磯海龍格納壕

横須賀・三浦半島は軍港を中心として様々な戦争遺跡が密集している地域です。絶望的な戦況にもかかわらず「本土決戦」を呼号し、国民・兵士に「玉砕」を強要した遺跡群です。悲惨で無謀な戦争の過去を思わずにはいられません。同時にここは、今でも自衛隊と米軍の基地・軍港・軍艦がひしめく軍都です。あちこちに軍事的緊張感がそこはかとなく漂っているようです。「新たな戦争遺跡をつくってはならない」という思いを新たにしました。

第 26 回 戦争遺跡保存全国シンポ(横須賀おっぱま大会)に参加して

会員//アミガサ事件 100 年の会・有吉堤竣工百年の会 関崎益男

第 26 回：全国シンポジウム(横須賀大会)への参加は、①東京大会(国立市・2007 年)、②川崎、③山梨、④館山(千葉)、⑤みなかみ(群馬)大会以来、六回目だった。経済的理由や仕事との兼ね合いから神奈川近県の大会には、出来るだけ参加しているのが現状だ。「会報」に掲載されるとその時々の近況・心境を伝えることができ、会員としての自覚も生まれる。

今回は、第一日目の大原一興氏(定義・機能・対象・形態(多様なエコミュージアム)・効果・エコミュージアム活動の生み出すもの・今後に向けて//※フランスのエコミュージアム構想等)が記念講演者だった。仕事の都合で拝聴することができなかった。(残念)

大会要項・レジュメ等によれば、エコミュージアムの理念・構想を講演されたようだ。ただ、二日目の分科会に出席した筆者は、千葉県の〈館山まるごと博物館〉は、この理念・構想の基づいた好事例のような印象を受け、前回大会に参加した時より格段と多岐にわたり拡大発展している印象だった。

第 2 日目の分科会は、第三分科会「平和博物館と次世代への継承」に参加。６本のレポート。6.池田恵美子さんの「館山まるごと博物館から東京湾エコミュージアムへ」は、エコミュージアムの可能性を実感させるものだった。特に、「C-1 大巌院のハングル「四面石塔」」(『館山まるごと博物館』26 頁所収)について、初めて知り興味を持った。

第三日目の見学会は、参加予定者に欠員がでたので「貝山地下壕と第三海堡(かいほう)遺構見学」と“よこすかポートマーケット”に参加した。NPO 法人 よこすかシティガイド協会(Y・T さん)による班ごと(6～10 名)に分かれての案内だった。班によって、かなり内容が異なるものだったという。今後、海外の旅行の様に、学習と観光(特産物/お土産)等をセットにすることは、重要なポイントとなろう。

次の日は、大会のチラシにあった金沢八景駅周辺の「原田弓子記念平和資料室(-原田さんのへや-)」を訪問した。原田さんは、生前：「貝山地下壕を保存する会」の活動をされていたと聞く。本会(日吉台地下壕保存の会)の新井揆博さんとの面識もあり、いっしょに協力して活動されていたという。

2 階の平和資料室の入り口には、新井さんの写った写真もあった。新井さんの横須賀地域での活動の一端を追体験することになった。

いずれにしても今大会への参加・出席は、戦争遺跡も地域の資産の一つとして活用する新たな視点・視座と自己の問題意識を深め、充実した大会だった。また、分科会の松代大本営平和祈念館「わかぞう合宿」の報告にあった：楽しくなければ、学習は継続しないと・・・

連載

日吉海軍・設備アレコレ（36）
日吉海軍の設備関係者の主要な手記・聞取り・文献

運営委員　山田　譲

日吉の海軍の設備について書いてきましたが、その根拠・出典資料をここで少し振り返ってみます。設備関係者というと戦時中は 30 才台が多く存命の方はいません。私たちの会の事務局長だった寺田貞治さんが精力的に聞取りをして手紙・手記もいただきました。それが慶應義塾生協ニュースの記事（1986 年～1994 年）になっています。また回想記も出版されています。それらの中から主要なものを紹介します。

＜土木・建築＞

①第 3010 設営隊隊長・伊東三郎技術大尉「地下海軍省分室と施設系残務整理回想記」（『海軍施設系技術官の記録』所収）

この回想記は見学会で配っている冊子の元になっている貴重な文献です。第 3010 設営隊は昭和 19 年 8 月 15 日付で誕生し兵力 1500 名と書かれています。先行駐屯していた第 300 設営隊が軍令部の待避壕設営に着工しており、その協力を得て連合艦隊司令部の隧道工事を短い所定工期内で完成させた。さらに人事局地下施設設営のため、柳瀬隊が鉄道工業㈱を協力作業隊として駐屯してきた。さらに地下施設には航空本部が入った。耐弾式竪坑が見事換気の役割を果たし、排水溝も壕外に排水していた。軍令部分室・人事局功績調査部（山梨県七里岩）・艦政本部・経理局・大倉山気象観測所の施設設営も引き受けた。戦後も施設系残務整理実施作業隊として第 5 中隊が残留した。日吉の施工法で特筆すべきものとしてＺ8 工法があり、これは直径 100～150㎜、長さ 60ｍの長孔穿孔技術であった。艦政本部地下施設ではセメントが底をつき田園調布焼跡の石垣の大谷石を使用したが、移転日は 8 月 15 日だった。また第 300 設営隊山本将雄元隊長の投書も付記され「軍令部の秘命で松代大本営に対応して、これと別個に海軍側首脳部二千名の入る大工事に着工した。」と書かれています。

②第 3010 設営隊主計長・御厨（みくりや）文雄主計中尉の聞取り、手記（生協ニュース第 51 号）

第 3010 設営隊関係者では御厨文雄氏も貴重なお話をしています。主計というのは部隊の事務方で給与会計、被服、資材調達、食事当番、酒や菓子の配給などが職務です。寺田さんによる聞取り記事と、本人の手記「海軍主計科士官の回想」があります。

それによれば第 3010 設営隊は大工・左官など徴用の兵からなり隊員は 1200 人。鉄道工業㈱からの派遣 2000 人。鉄道工業の人のうち少なくとも 700 人は朝鮮人労働者。難工事をやらされ待遇もひどかった。昼夜 3 交替で重労働なので酒も出した。タバコは 1 日 8 本配給。

御厨氏は学徒兵で、昭和 20 年 2 月に第 3010 設営隊の主計長職務執行に任命された。セメント不足をおぎなうために宇都宮などの原産地から大谷石を収集し、最後には田園調布の焼跡から何万本かの大谷石を収集、購入した。第 3010 設営隊は昭和 20 年 9 月以降、松代の大本営築城工事に進出する計画で、陸軍部隊と大本営守備隊を特別編成する予定もあったそうです。第 3010 設営隊の人数は 1200 人とのことで、伊東三郎氏の 1500 人とちがっています。よくわかりませんが、時期によって人数の増減があったのかもしれません。

③第 203 設営隊ソロン派遣隊長・佐用泰司技術大尉の著書『基地設営戦の全貌』『海軍設営隊の太平洋戦争』

佐用泰司氏は日吉には関わっていませんが、地下壕の構造、築造の実務についてくわしく書いています。それで地下壕での自然通風の仕組みと構造がわかりました。壕内に高低差をつけることで内外温度差による自然通風が生じることは、この本ではじめて知りました。

設営隊の組織編成もわかりました。設営隊には甲乙丙丁の 4 つの編成があるのですが、最大の甲編成では総計 1036 人で 4 中隊。各中隊は機械運転員、土工員、建築員、隧道員などに分かれていて、これに運輸隊、医務隊、主計隊、通信隊が加わります。この編成はあくまで標準編成です。第 300 設営隊は昭和 20 年 3 月時点で「准甲編成」880 人でした。

④連合艦隊司令部機関科電機長・菅谷源作上等機関兵曹の手記（生協ニュース 53 号）

菅谷氏は昭和 19 年 9 月 19 日に連合艦隊司令部付となり先遣隊として日吉に来ました。機関科は 27 名で水・電気などの確保、ボイラー、自動車運転もしました。鳥当番というニワトリの世話係も 2 名いました。地下壕内に発電機があり絶えず発電していたそうです。昭和 20 年 4 月 4 日の空襲で機関科の宿舎だった建物が焼けた時、藤原という兵隊が亡くなりました。菅谷氏は有隣堂書店がだしている「有隣」新聞でも日吉の思い出を話しています。

⑤航空本部理事生・秋元智恵子さんの手紙（生協ニュース 68 号）

航空本部総務部一課の理事生だった秋元さんは、昭和 20 年 6 月 13 日に日吉の地下壕に来ました。場所は私たちが①Ｂと言っているエリアです。航空本部の総務部は一課、二課、三課です。航空本部は他に第一部、第二部、教育部が来ました。軍令部第三部、東京通信隊もこのエリアに来ました。秋元さんは各部署の地下壕内の配置図も描いてくださいました。これがとても貴重な資料になっています。手紙には壕内の湿気で電灯がショートするほどだったこと、敗戦後、書類の焼却が 3、4 日続いたことなどが書かれています。

＜通信＞

①連合艦隊司令部電信員・下村恒夫氏の手紙（生協ニュース 69 号）

下村氏は昭和 19 年 9 月 29 日に巡洋艦大淀から日吉に司令部の一員として移転してきました。階級は不明ですが上級の下士官です。移転当時、地下電信室は建設中で日吉の台地北側の素掘りの防空壕に 92 式特受信機を持ち込んだとのことです。送信は東京通信隊に有線でモールス信号を送ったそうです。ただし緊急の作戦命令は日吉の地下から東京通信隊送信所の送信機を直接動かして送信できるようになっていた。敵国通信を傍受する敵信班（特信班）は寄宿舎北寮 3 階にいた。地下電信室には受信機は 30 台位。蛍光灯が輝き真昼のように明るかったと書いています。

この手紙には連合艦隊司令部地下壕中枢部の各部屋の用途をしるした図や、電信室の断面図、電信室内の配置図、壕外のカマボコ兵舎の平面図と側面図、壕内にも二段ベッドがあったことなど、貴重な資料が添えられています。

②軍令部通信課長・鮫島素直大佐の著書『元軍令部通信課長の回想』

鮫島氏は日吉には直接かかわってはいません。霞が関の海軍省にいて海軍通信の中心にいた人です。昭和 11 年には連合艦隊参謀だったこともあります。

この本は海軍の通信に関わるほとんどすべてがわかると言っていいものです。その中で日吉の設備に関わるものとしては、電源設備、アンテナ設備、受信機の種類などが書かれています。電源としては非常電源としてディーゼル交流発電機、整流器（水銀整流器）、変圧器、大型蓄電池について書かれています。アンテナ線を張るための柱は、鉄塔だと敵機の目標となるので目立たぬように小木柱を使ったとのことです。電柱を 3 本つないであったという元暗号兵・栗原啓二さんの話と一致します。暗号のこともくわしく書かれています。

お知らせ

慶應義塾三田キャンパスにある「福澤諭吉記念慶應義塾史展示館」の 2023 年度企画展は「曾禰中條建築事務所と慶應義塾」です。春は明治・大正編として三田や信濃町（医学部）キャンパスを中心に、秋は昭和編として日吉キャンパスに光が当たります。詳細は同封のチラシをご覧ください。チラシの裏面（2 枚目）に、記念講演会のご案内があります。ふるってご参加ください。

◇記念講演会「慶應義塾日吉キャンパスをめぐって」

日時：10 月 21 日（土）13 時～15 時
講師：吉田鋼市さん（建築史家）　聞き手：阿久澤武史（当会会長）
会場：慶應義塾高等学校内の日吉協育ホール
無料で定員 250 名（申込制）となります。
申し込み方法は、塾史展示館の HP から 9/15（金）より受付。なお、これに関係して・・

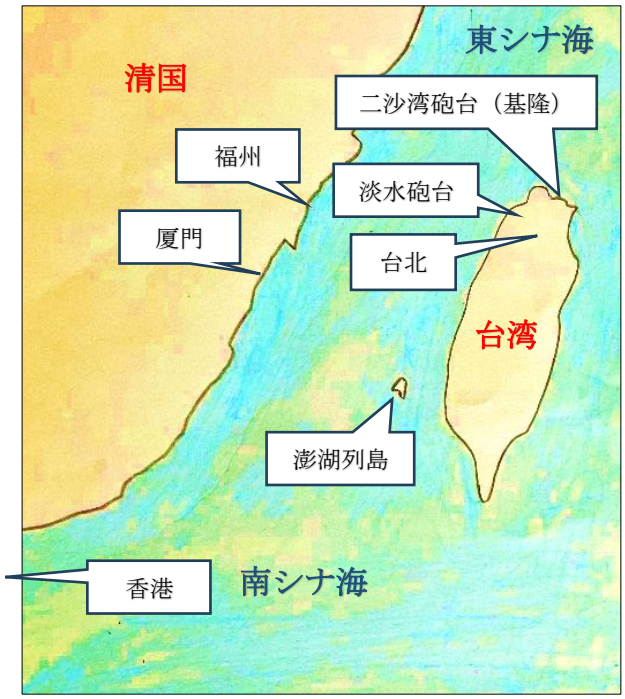
◇「日吉キャンパスの建築特別見学会」を行います。

日時：11 月 4 日（土）の午前と午後の 2 回
見学場所：第一校舎・チャペル・寄宿舎など（以上、予定）
申し込み方法：同上（詳細はチラシ参照）

連載

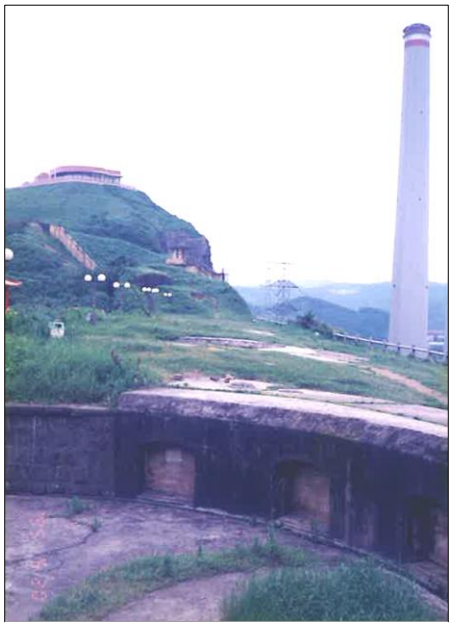
海外の戦跡めぐり（24）台湾と清仏戦争

運営委員　佐藤宗達



東シナ海に浮かぶ台湾は海の交通の要所に位置するため、多くの国から注目されていた。17 世紀に入るとオランダが台湾を占領統治し（1624～1662）、その後、清朝に抵抗し明国復活を目指す鄭成功（近松門左衛門・国姓爺合戦の主人公）がオランダを追放して統治することに（1662～1683）。鄭政権崩壊後、清国領となったが、清は「台湾は化外の地」として消極的統治体制となっていた（1683～1895）。

19 世紀になると列強のアジア進出により台湾にも多くの国が押し寄せてきた。阿片戦争(1840～1842)では英国軍艦が基隆の砲台「二沙湾砲台」を攻撃。1854 年、米国ペリー艦隊は日本遠征の途中、石炭補給のため基隆に寄港（基隆の炭鉱は今でも国内需要があり採掘を継続中）。日本は琉球漂流民殺害を口実に 1874 年、台湾に出兵（牡丹社事件）。



二沙湾砲台/基隆（筆者撮影）

東南アジアでの植民地獲得を目論むフランスは、先ずベトナムに侵攻し仏領コーチシナを形成し（コーチシナ戦争：1858～1862）、東南アジア進出の拠点とした。フランスはベトナム各地での戦闘を繰り返し侵略地域を広げ、支配権をめぐり宗主国である清国との衝突に発展。1884 年 8 月、台湾（基隆）にフランス海兵部隊を上陸させ清国軍と交戦となり、清仏戦争が勃発した（1884～1885）。清国沿岸（福州等）での戦闘もあるが、基隆、淡水など、台湾が清仏戦争の主な戦場となった。戦場はベトナム、澎湖列島での海戦などを経て 1885 年 4 月停戦となり、イギリスの調停（天津条約）により、清は宗主権を放棄、ベトナムはフランスの保護領となった。以降、カンボジアを含め仏領インドシナが成立し、後にラオスなども植民地としてインドシナ半島での領土を拡大させていった。

淡水砲台の地下壕
（筆者撮影）

今も、清仏戦争の主戦場となった台湾には戦争遺跡が残っています。「二沙湾砲台」は 1840 年、国防強化（対アヘン戦争）の目的で基隆港を見下ろす二沙山上に築かれたが、清仏戦争でフランス軍の砲撃を受け大破。1885 年、ドイツ人技師を招いて新式砲台を再建、現在も砲台は残っております。また「淡水砲台」は 1876 年、台湾の中心地、台北北部の淡水川河口を望む丘の上に築かれたが、こちらもフランス軍の攻撃を受け大破となり、1886 年ドイツ人技師により新式砲台が再建された。現在は台座が残るだけですが地下壕も残存しており、基隆の砲台よりも規模の大きな砲台をみることができます。

感想文　『検証　ウクライナ侵攻 10 の焦点』（朝日新聞取材班著）を読んで

運営委員　山田　譲

この本はロシア軍のウクライナ侵攻開始から 400 日間にわたる現地取材活動の記録です。欧米や中国など諸外国の動向も含めて 10 の視点に整理してまとめられています。現地や避難先の「市井の人たち」への地道で丁寧な取材が際立っています。

その中で私がハッとさせられたのは第 5 章「[爪痕]　復興とそれを妨げるもの」です。開戦直後にロシア軍は首都キーウ占領をめざして侵攻してきました。激戦は 4 月まで続きロシア軍は敗退して撤退しました。その攻防の焦点がイルピンの町です。ここは虐殺で有名なブチャの東側で、付近一帯の村々も一時ロシア軍に占領されました。ここにロシア軍は大量の対人地雷をしかけて撤退しました。

ノビマカレビチ村のペトロ・カシュピリコさん（59 才）は 4 月 9 日の朝、森の中の小道で地雷を踏み、右足の下 20 センチほどを失ってしまいました。2 週間の入院後、自宅に戻ってからも「天気が変わると傷口が痛む。どこに相談すれば義足が作れるのかもわからない」と言っています。しかしカシュピリコさんは「地雷を踏んだのが孫でなく、私だったのが幸いです。神は存在していた」とも言ったそうです。本には、右足のないカシュピリコさんが両手で杖をついて立っている前に、3 才位の男の子が写っている写真がのせられていました。こういう地雷の被害がウクライナ全土に広がっています。

私はこの話を読んで、自分が戦争体験者の方々のお話をお聞きした時のことを想いおこしました。私がお聞きした話は、はるか過去の戦時中のことです。でもその戦時中の当時にお話を聞いたならば、朝日新聞の記者がカシュピリコさんから聞いたような話になるんだと思ったのです。戦争の過去と現在が急にピッタリつながったような気がしました。

またカシュピリコさんが自分の不幸を嘆くのでなく、孫の無事に感謝していることにも強く心を動かされました。取材した記者はそのことへの自分自身の気持ちを記事には書いていません。でも行間に、いわく言い難い気持ちがにじみ出ています。自分より孫、自分より家族、自分より回りの人たち。こういう心のつながりがウクライナの人たちの不屈の闘いをささえているのだと思います。そしてそういう精神は今、急に生まれたわけでなく他国に支配され苦難にたえてきた長い歴史があるのだと思います。支配者が誰であろうと自分たちはともに支え合う。これが本当の歴史の原動力なのだろうなあと思いました。

キキョウの花

地雷の被害を受けたのが、「孫でなくて、私でよかった」と話すペトロ・カシュピルコさん（右）＝2022 年 6 月 2 日、ウクライナ・ノビマカレビチ村、矢木隆晴撮影

同書掲載写真

報告　地下壕展示会と講演会

運営委員　小山信雄

昨年に続き“日吉の本だな（日吉図書取次所)”にてパネル展示会を行いました。日吉の本だなは、昨年１月に慶應義塾大学日吉キャンパス内（協生館１F）にオープンし、全ての横浜市立図書館の本の貸出、返却サービスを行っています。8 月 6 日（日）～8 月 31 日（木）迄、パネルの展示を行い、多くの方の関心を集めることが出来ました。

また、コロナにより中止となっていた港北図書館（菊名）でのパネル展示会、および講演会を昨年に続き開催することが出来ました。展示会の期間は、7 月 1 日（土）～8 月 5 日（土)。昨年に引き続きコロナ対策も含め慎重に関係者と事前対応を協議の上、開催に漕ぎつけました。会場の港北図書館１階の“港北まちの情報コーナー”で展示パネルに関心を持っていただける方々も数多く、7 月 8 日（土）と 7 月 22 日（土）の両日には、個別の説明を行う“ミニレクチャー”も行い、日吉台地下壕への関心と理解を深めていただけたものと思われました。8 月 5 日（土）には図書館二階の会議室で講演会を行いました。コロナが第五類に移行したとはいえまだまだ不安が拭い去れない中、猛暑の日ではありましたが多くの方々に来場いただけ、90 分の講演の後の質疑応答時間には複数の方々から質問やご意見をいただきました。またアンケートにも多くのご意見や感想をいただきました。地下壕の存在を明確にご存じの方は数少なく、「是非見学してみたい」とのご意見も多く寄せられました。地道な活動ではありますが、今後とも継続して地下壕の存在を広めて行ければと思います。

講演会　於：港北図書館会議室

訃報

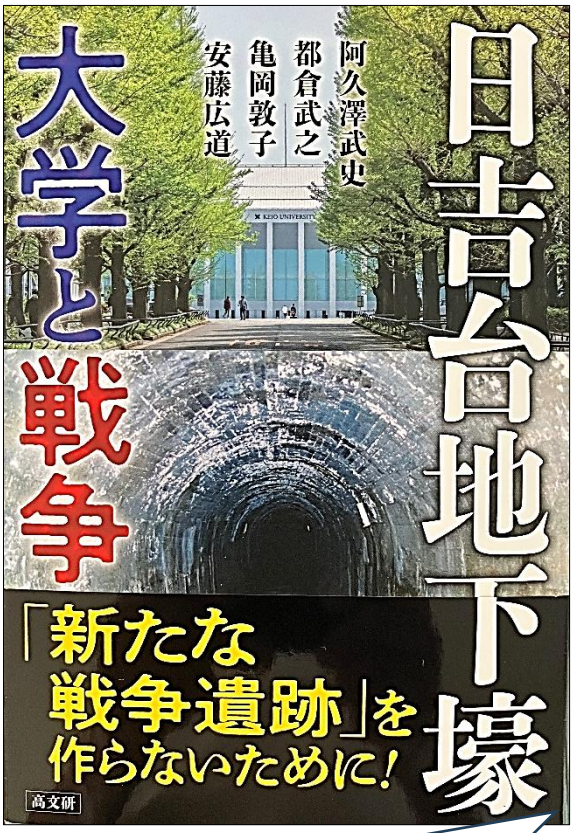
◇中沢正子さんが７月、お亡くなりになりました。1989（平成元）年の発足時から立ち上げのメンバーとして、長年当会の発展に貢献していただいておりました。心よりの感謝とご冥福をお祈りいたします。

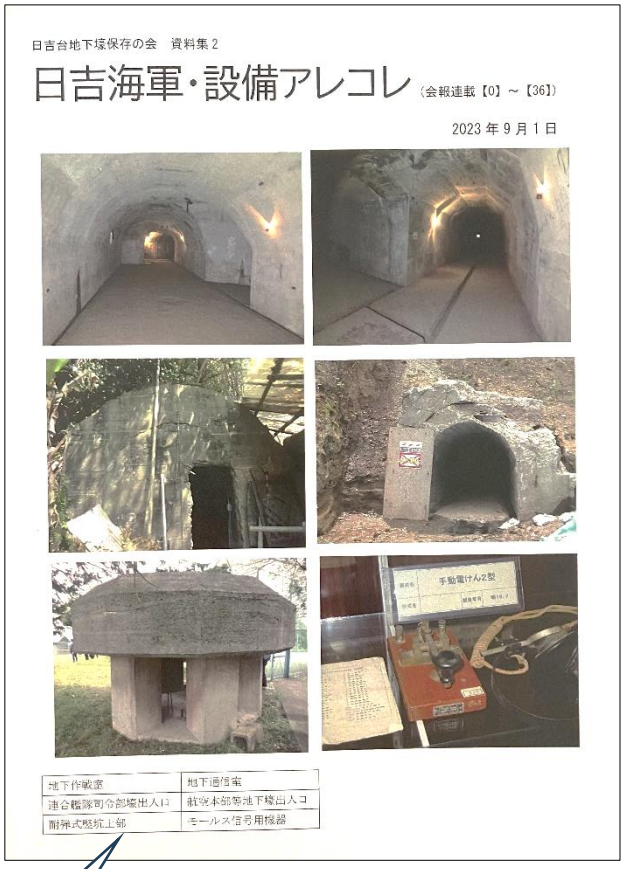
◇体調がお悪いことは、以前からお伺いしていたのですが、本当に残念です。我が家でのガイド学習会に何度も足を運んでいただいていた頃のこと、また、日吉の空襲の聞き取り調査を共にやっていただいたこと、そしてなによりも保存の会の結成の集いにご一緒していただいたことなど、一気に記憶がよみがえっています。ご冥福をお祈りします。会員　茂呂秀宏

◇中沢さんは、私の職場の大先輩です。３人のお子さんを生み育てながら仕事をしている。仕事だけでなく、地下壕保存の会に参加され、地域で民生委員をされ、また第九の合唱団に参加されるなど、スーパーウーマンでした。4 年前に足が痛くて会への参加ができなくなって、中沢さんとお電話をした時に、話すのは大丈夫だけどねと、お話ししたのですが、その後はご家族の方からご様子を伺うのみでした。最後は穏やかに逝かれたとのことです。
本当にありがとうございました。　運営委員　上野美代子

本、資料集の発行

この度、9/1 付けで以下の本、および資料集１（日吉は戦場だった：2015.12.5 発行）に続く、資料集２、３が発行されましたのでお知らせいたします。

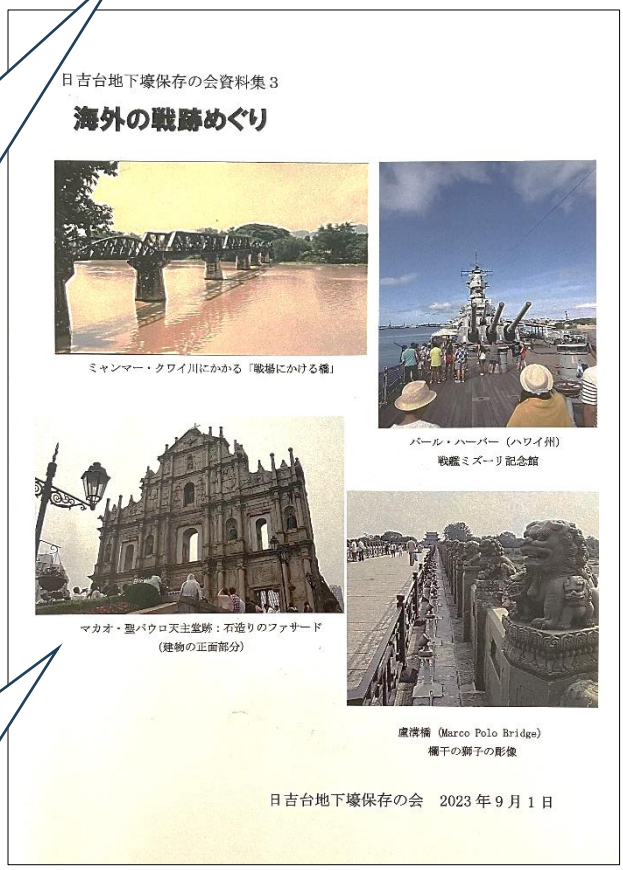




日吉台地下壕－大学と戦争（高文研）

戦争遺跡は一般に「負の遺産」と言われる。「理想的学園」をめざして作られた大学のキャンパスに、地下の軍事施設など本来存在する必要のないものである。海軍がここに来て、学問と教育の場が戦争を推し進める中心点となり、地域の人々は静かな日常を奪われた。「日吉」という土地は、こうした加害と被害の現実が交錯し、地下壕は文字通りの「負の遺産」として、いまもなおそこに存在している。

＜本書「Ｉ日吉台地下壕の概説と研究史」より＞



資料集２　日吉海軍・設備アレコレ（日吉台地下壕保存の会刊）

会報連載【0】～【36】

日吉の海軍が使用した地下壕はどのようにつくられたのか。地上も含めて、どのような設備が使われていたのか。会報連載記事をまとめたものです。

資料集３　海外の戦跡めぐり（日吉台地下壕保存の会刊）

会報連載【1】～【23】

日清、日露、アジア太平洋戦争での海外現地訪問の記録に留まらず、19 世紀に起こった阿片戦争（一次、二次）や太平天国の乱の現場に足を運んだレポートも含む連載記事です。

☆活動の記録　2023 年 7 月～10 月

７/１㈯～８/５㈯　日吉台地下壕パネル展示会（横浜市港北図書館）
（７/８㈯、７/２２㈯　会場にてミニレクチャー）
７/６㈭　会報 154 号発送　運営委員会　（来往舎小会議室）
７/１２㈬　定例見学会　28 名
７/１５㈯　第 16 期ガイド養成講座④
（来往舎中会議室）　修了者 16 名
７/２２㈯　定例見学会　３３名
７/２９㈯　夏休み見学会　30 名
８/５㈯　夏休み見学会　15 名
講演会　「日吉にある戦争遺跡について」
港北図書館会議室
８/６㈰～８/３１㈭　日吉台地下壕パネル
展示会（日吉の本だな）
８/９㈬　定例見学会　23 名
８/１２㈯　定例見学会　17 名
８/２７㈰　ガイド学習会（日吉地区センター）
８/３１㈭　日吉地区センター設置講座打ち合わせ（日吉地区センター）
９/７㈭　運営委員会（来往舎小会議室）
９/９㈯　日吉地区センター設置講座①　30 名（日吉地区センター）
９/１３㈬　定例見学会　28 名
９/１６㈯～９/１８㈪　第 26 回戦争遺跡保存全国シンポジウム横須賀おっぱま大会
（横須賀市追浜コミュニティセンター）
16 日　プレツァー（野島と掩体壕）・全体会・講演会・懇親会　17 日　分科会
18 日　現地見学会　①旧海軍地下壕と戦争遺跡　②三浦半島に残る本土決戦の遺跡
９/２９㈮　地下壕見学会　慶應義塾学生総合センター・学生部　37 名
９/３０㈯　定例見学会　48 名
１０/５㈭　運営委員会（来往舎小会議室）

学生総合センター見学会（9 月 29 日）

〇地下壕見学会について
定例見学会は毎月 2 回　定員 30 名　第 2 水曜日・第 4 土曜日午後（12 月 13 日までは締め切りました）

☆学校関係（学術・教育）の見学は定例以外にもご相談で実施しています。
★お問合せ・申込みは見学会窓口まで
TEL/FAX　０４５－５６２―０４４３
喜田（午前・夜間）

2023.6.17.ガイド養成講座第 3 回

連絡先（会計）亀岡敦子：〒223-0064 横浜市港北区下田町 5-20-15 ℡ 045-561-2758
（見学会・その他）喜田美登里：横浜市港北区下田町 2-1-33 ℡ 045-562-0443
ホームページ・アドレス：http://hiyoshidai-chikagou.net/

日吉台地下壕保存の会会報　（年会費）一口二千円以上
発行　日吉台地下壕保存の会　郵便振込口座番号 00250-2-74921
代表　阿久澤　武史　（加入者名）日吉台地下壕保存の会
日吉台地下壕保存の会運営委員会